

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

- ▶ 「作品」という「現実」－佐藤春夫「日章旗の下に」をめぐ
るノート－

doi:10.29714/TKJJ.200712.0008

淡江日本論叢, (16), 2007

作者/Author： 落合由治

頁數/Page： 111-134

出版日期/Publication Date：2007/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200712.0008>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



「作品」という「現実」

—佐藤春夫「日章旗の下に」をめぐるノート—

落合由治

1. はじめに

今、「現実」あるいは「事実」の概念に関して人文・社会科学研究の中で、大きな転換が起ころうとしている。認知言語学はもとより、社会言語学、テキストディスコース研究、質的研究、コミュニケーション研究など、さまざまな視点から人間がどのように言語をとおして現実を捉え、それと交渉しているかについて研究が進んでいるが、研究の多様性の中でも共通しているのは、それがすべて何らかの意味で言語と関わっているという点である。

「作品」は主に専門的なジャンルの芸術的成果と考えられてきた。しかし、それは人間が日常的に行っている言語をとおしての「現実」との多様な関係の象徴あるいは最も昇華された姿であると考えれば、「作品」から読み取りえるさまざまな内容は、日常的な主体の現実との関係と並行させて捉えられうると言える。ここでは、台湾に関して佐藤春夫が残した「日章旗の下に」を取り上げ、「作品」からどのような「現実」が読み取り得るのかをとおして、主体と現実との関係をスケッチしてみたい。

2. 佐藤春夫「日章旗の下に」ノート

1. 佐藤春夫（さとう・はるお）の経歴と現在の文学的評価

佐藤春夫という作家は、同時代をすでに離れて、意味や脈絡の広がりを持った既知の固有名詞としては、現在の読者の中では十分働いていない。資料での「経歴」という脈絡からまず「佐藤春夫」という固有名詞を読んでみよう。

（1）経歴

1892（明治25）年4月9日：和歌山県新宮町（現在の新宮市）に、佐藤豊太郎の長男として生まれる。生家は下里町で六代つづいた懸泉堂という医家で、父の代になって新宮に移り、外科病院を開業する。父は狂歌、狂句をよくし、鏡水と号したが、医者が多忙を嫌い、北海道で農場を開くのが夢だったという。

新宮中学に入学後、文学を志望するが、問題児であったため、三年時に落第。1909年、17歳で「スバル」創刊号に短歌十首を発表。

同年、文学講演会で新宮を訪れた生田長江、與謝野寛、石井柏亭と知りあう。生田の勧めでおこなった文学の虚無主義などの演説が問題化し、無期停学となる。新宮中学では同盟休校の騒ぎがあり、嫌疑をさけるために上京し、生田家に世話になる。

1910（明治 43）年：新宮中学卒業後、上京。生田門下にはいり、終生の友となる堀口大學を知る。この年、永井荷風が慶應義塾文科の教授となったので、堀口とともに慶應予科に入学。在学中から「三田文学」、「中央公論」に寄稿。1914 年、慶應義塾を退学。鴎外と面識。文学に行き詰まり、油絵に向かう。神経衰弱がひどくなり、1916 年、神奈川県都築郡中里村（現在の横浜市青葉区鉄町）に犬二匹と同棲相手の女優とともに転居。ここでの生活を題材に、「田園の憂鬱」と「お絹とその兄弟」が生まれる。

1917（大正 6）年：「西班牙犬の家」をかわきりに、初期の代表作を次々と発表。翌年、「田園の憂鬱」の元型である『病める薔薇』を谷崎潤一郎の序文を冠して刊行し、注目を集めるが、谷崎夫人の千代子との恋愛問題により神経衰弱が高じ、1920 年帰郷、気分を変えるために台湾旅行に出る。翌年、谷崎夫人の千代子との問題で谷崎と絶交する。同年、『殉情詩集』（「秋刀魚の歌」）を刊行。1923 年、『都会の憂鬱』を刊行。1926 年、大正批評を代表する『退屈読本』を刊行。漢詩の翻案を集めた『車塵集』、『平妖伝』、『ほるとがる文』など、翻訳もある。

この間、小川タミと結婚をして谷崎との交友が復活するが、1930 年、タミと離婚し、谷崎夫妻と話しあった結果、千代子夫人を譲りうける。三人連名の挨拶状を出す。いわゆる「細君譲渡事件」である。

1935（昭和 10）年：芥川賞設立とともに銓衡委員になり、1962 年まで 27 年間委員をつとめる。1938 年、「新日本」の編集に関係し、中国戦線におもむき、『東天紅』、『戦線詩集』、『大東亜戦争』を刊行する。1945 年、佐久に疎開し、敗戦をむかえる。

1954（昭和 29）年、『晶子曼陀羅』を刊行し、読売文学賞を受ける。1957 年、マゾッホの『毛皮を着たヴィーナス』の翻訳を刊行。1960 年、『小説永井荷風伝』を刊行。文化勲章を受ける。

1964（昭和 39）年、5 月 6 日、自宅でラジオの収録中、心筋梗塞で急逝。72 歳。

(以上、<http://www.horagai.com/www/who/21satoh1.htm> ほら貝・加藤

鉾一／岡田純也(1966)『佐藤春夫』清水書院による)

佐藤春夫の台湾関連作品は恋愛問題が起こっていた以上のような経歴から理解される。しかし、佐藤の恋愛問題は、白樺派の家族関係など同時代に戻って考察するとそれ自体日本の近代を示すひとつの徴表かもしれない。

「作家の死」の概念から言えば、こうした経歴から「作品」という現実を解釈するのは、明らかに「作品」の無視である。

(2) 現在、どのような作品が読まれているか。

次に、佐藤春夫は現在、小説家としてよりも詩人として記憶されていることが多いようである。

(a) 現在の評価は詩人としてのほうが高い。

彼の文学が、小説よりも詩を高く評価され、結局彼は詩人であったとよく言われるが、「秋刀魚の歌」と同じ素材を扱った数編の散文の方が、かえって曖昧な作品で、高い評価も受けていないことを考えただけでも理由のないことではないのである。(岡田純也(1966)『佐藤春夫』清水書院 P69)

故郷の新宮市に開かれた「佐藤春夫記念館」のホームページでも、「最晩年には(昭和 39 年 10 月の)オリンピック東京大会の開会式で斉唱される「賛歌」の作詞を NHK から委嘱されるような国民的大詩人でもありました」と書かれている。(http://www.city.shingu.wakayama.jp/culture/haruol.htm)

「秋刀魚の歌」 / 佐藤 春夫 / 大正 10 年

あはれ

秋かぜよ

情あらば伝えてよ

――男ありて

今日の夕餉に ひとり

さんまを食ひて 思ひにふける と。

さんま、さんま、

そが上に青き蜜柑の酸をしたたらせて

さんまを食ふはその男がふる里のならひなり

そのならひをあやしみなつかしみて 女は

いくたびか青き蜜柑をもぎ来て夕餉にむかひけむ。

あはれ、人にすてられんとする人妻と

妻にそむかれたる男と食卓にむかへば、
愛うすき父を有ちし女の児は
小さき箸をあやつりなやみつつ
父ならぬ男にさんまの腸をくれむと言ふにあらずや。

あはれ

秋かぜよ

汝こそは見つらめ

世のつねならぬかの団欒（まどい）を

いかに

秋かぜよ

いとせめて 証せよ

かの一ときの団欒ゆめに非ず と。

あはれ秋かぜよ

情あらば伝へてよ、

夫に去られさりし妻と

父を失はざりし幼児とに

伝へてよ

——男ありて

今日の夕餉に ひとり

さんまを食らひて

涙をながす と。

さんま、さんま、

さんま苦いか塩っぱいか。

そが上に熱き涙をしたたらせて

さんまを食ふはいつこの里のならひぞや。

げにそは問はまほしくをかし。

(b) もう一つの評価は推理小説家としてのものである

佐藤春夫は推理小説家としては現代でも読まれている。

『怪奇探偵小説名作選〈4〉佐藤春夫集—夢を築く人々—』ちくま文庫
谷崎潤一郎とともに探偵小説のジャンルも開拓し、のちに文壇の重鎮的
存在となった佐藤春夫の、幻想美溢れる作品世界。初期の代表作「西班

「牙犬の家」、探偵小説の先駆けとなり谷崎が絶賛した「指紋」、新しい方法意識で小説世界の幅を広げた未来都市小説「のんしゃらん記録」の他「女人焚死」「女誠扇奇譚」など、幻想・耽美的作品を収録。また評論として「探偵小説評論」「探偵小説と芸術味」も収録。収録されているのは以下の作品

西班牙犬の家 指紋 月かげ 陳述 「オカアサン」 アダム・ルックスが遺書 家常茶飯 痛ましい発見 時計のいたずら 黄昏の殺人 奇談 化物屋敷 山妖海異 のんしゃらん記録 小草の夢 マンディ・バナス 或るフェミニストの話 女誠扇奇談 美しき町

探偵小説専門誌『幻影城』と日本の探偵作家たち (<http://members.at.infoseek.co.jp/tanteisakka/sa.html>) によれば、以下の作品が探偵小説として、アンソロジーなどに取り上げられたことがある。

1917 年(大 6)、「西班牙犬の家」を発表。

1918 年(大 7)、「中央公論」に掲載した「指紋」がはじめての探偵小説。

1924 年(大 13)には、「新青年」に評論「探偵小説小論」を発表し、探偵小説を詩的に定義した。

1926 年(大 15)、「オカアサン」を「女性」に発表。

1930 年(昭 5)、「谷崎潤一郎の前夫人と結婚。

1948 年(昭 23)、芸術会員。

1949 年(昭 24)に発表した「老残」は日本文藝家協会の「創作代表選集 第 5 卷(昭和 24 年後期)」に収録される。

1950 年(昭 25)に発表した「戦国佐久」は日本文藝家協会の「創作代表選集 第 7 卷(昭和 25 年後期)」に収録される。

1951 年(昭 26)、「女人焚死」を「改造」に発表。

1952 年(昭 27)に発表した「日照雨」は日本文藝家協会の「創作代表選集 第 11 卷(昭和 27 年後期)」に収録される。

1952 年(昭 27)に発表した「少年詩人」は日本文藝家協会の「戯曲代表選集 第 1」に収録される。

1953 年(昭 28)、読売文学賞受賞。

1954 年(昭 29)に発表した「佐久の内裏」は日本文藝家協会の「創作代表選集 第 15 卷(昭和 29 年後期)」に収録される。

1961 年(昭 36)、文化勲章受章。

「三田文学」を復刊させ、松本清張などを世に送り出した。

1963 年(昭 38)に発表した「碧玉の夢」は日本文藝家協会の「文学選集

29 昭和 39 年版」に収録される。

1964 年(昭 39)に発表した「愛猫知美の死」は日本文藝家協会の「文学選集 30 昭和 40 年版」に収録される。

佐藤春夫は以上のように近代小説の多面化、マルチメディア化的側面からも注目される。

(c) 文壇政治家的な側面

もう一つは昭和の文壇を支配した政治家的側面である。芥川賞をめぐる太宰治と川端康成、佐藤春夫の軋轢は今に伝わる有名な逸話になっている。

太宰の杉並時代 (<http://www.asahi-net.or.jp/~hm9k-ajm/musasino/asagayakaiwai/dazai/dazai3.htm>) によると、経緯は以下のとおりである。

1935(昭和 10)年、太宰治 27 歳、佐藤春夫 43 歳のとき。太宰はこの頃、杉並に戻る前、千葉船橋の家でパピナル中毒は更に進行した。太宰の精神状況はひどくなっていた。パピナル中毒の最中で状況はひどかった。中畑氏はこう述べる。

『・・・その頃、この船橋の縁の下をヒョイとのぞいてみたら、国許から送ってやったリンゴ箱に、たっぷり三倍半のパピナルの空アンブルが入っておって驚いたことも鮮かに憶えています。』(新文芸読本 太宰治 p 26 河出書房新社)

このパピナルも、地元の医者や半ば脅かして処方させたもので、友人達から借りた借金の額は 500 円近くに及んでいたという。足りなくて、あの縁を切っている兄文治にも申し込みをする。

・・・早く返却申シタク、兄上様、貸シテ下サイ。七月末日ニ五十円。八月末日、百円。九月末に百五十円。シッカリ精進、キット汚名ヲソソギマス・・・

その 1 月、「文芸春秋」に「芥川・直木賞宣言」として、故芥川龍之介、直木三十五氏の名を記念するため「芥川龍之介賞」と「直木三十五賞」を制定し、文芸興隆の一端とすることが発表された。この第 1 回と第 3 回の受賞について、自作が対象外になったことを巡って、太宰と選考者「川端康成」「佐藤春夫」との間で、騒動めいたやりとりがあった。太宰が受賞に固執した理由を巡って、パピナル中毒、借金などが分析される一方、これを契機に、太宰の心理、書き方に変化が生じたことが指摘される。

騒動は 2 回起こった。最初は第 1 回芥川賞を巡ってであった。8 月、第 1 回芥川賞候補に、太宰の書いた「逆行」「道化の華」が推されてい

ることを知らされたのに、(佐藤春夫の義兄からという)、選考の結果、受賞作は石川達三「蒼氓」で、太宰と高見順、衣巻省三、外村繁は次席になった。

『文芸春秋』9月号に、芥川賞選考の経緯が公表された。その中で、川端康成が太宰の生活について

『・・・なるほど道化の華の方が作者の生活や文学観を一杯にもっているが、私見によれば、作者目下の生活に厭な雲ありて、才能の素直に発せざる憾みあった』

と指摘するところがあり、太宰は、憤激した。ここから騒動が始まった。

太宰は、『文芸通信』10月号に、「川端康成へ」として、「芥川賞後日異聞二篇」を書いて反論した。

『・・・おたがいにな手な嘘はつかないことにしよう。・・・日本にまだない小説だと友人間に威張ってまわった。・・・』

今年の正月ごろ友人の檀一雄がそれを読み、これは、君、傑作だ、どこかの雑誌社へ持ち込め、僕は川端康成氏のところへたのみに行ってみる。川端氏になら、きっとこの作品が判るにちがいない、と言った。

小鳥を飼い、舞踏を見るのがそんなに立派な生活なのか。刺す。そうも思った。大悪党だと思った。・・・』

(新潮文庫 もの思う葦 p194 川端康成へ)

川端は同誌11月号で、「太宰治氏へ芥川賞について」を書き、太宰に選考経過についての誤解を解くことを求め、一方で自分の「生活に厭な雲ありて、才能の素直に発せざる憾みあった」も「不遜の暴言」であるならば、潔く取り消し、「道化の華」は後日読み直してみたい」と釈明した。

文中名前の出た檀一雄は「小説 太宰治」の中で

『・・・第一回芥川賞の受賞を切望した、太宰の気持ちの中には、例の激しい虚栄心があったろうが、モヒ剤入手への中毒者心理もあったろう。また、その入手の際の友人、知己から借り入れた、金に対する心の苛責もあったろう。・・・』

と書く。これが第1回芥川賞騒動であった。なお、これを機に、太宰は、太宰を支持し芥川賞の選考委員でもあった「佐藤春夫」に師事する。翌年、第2回芥川賞騒動が起こった。

6月29日、パビナール中毒による妄想もあってか、太宰は川端康成に、

自作「晩年」が芥川賞受賞作品となるように願って、切々たる手紙を書いている。

『・・・生まれてはじめての賞金、わが半年分の旅費 あわてず あせらず 十分の精進 静養もはじめて可能労作 生涯いちど 報いられてよしと 客観数学的な正確さ 一点 うたがい申しませぬ 何卒 私に 与えて下さい 一点の駆引ごさいません・・・』（新潮日本文学アルバム 太宰治 p 42-43）

また、三日にあけず、佐藤春夫宅を訪問し、涙ながらに訴えたとの話もある。

7月、「虚構の春」を『文学界』七月号に発表。

8月、太宰は「創世記」の執筆とパピナール中毒、肺病を癒すため、単身、群馬県谷川温泉に滞在した。第3回芥川賞候補に「晩年」が上がっていることから、期するものがあつた。なんでもかんでも、賞金が欲しかった。あらかじめ受賞を前提に借金もした。名誉のためか、故郷に出した受賞を予定する手紙類も残っている。しかしながら、今回も受賞はできなかった。

太宰のショックは大きかった。それは怒りとなって、「創世記」に「山上通信」を書き加えて鬱憤をぶちまけた。太宰は佐藤春夫にさえ裏切られたと受け取り

『・・・先日、佐藤先生よりハナシガアルからスグコイという電報がございましたので、お伺い申しますと、・・・私は照れくさく小田君など長い辛抱の精進に報いるのも悪くないと思ったので、一応おことわりして置いたが、お前はほしいか、というお話であつた。・・・』（新潮文庫 二十世紀の騎手 創世記 p 135）

と、一種の内輪話の暴露めいたことを書いた。ここから、佐藤春夫との行き違いが生ずる。佐藤春夫は太宰の才能を認めながら、「芥川賞」と題して作品を書き

『・・・以後、あの男とは第三者を交えずには対話も出来ないと不安である。・・・』

と言うまでになった。しかし、後に「希有の文才」として 『・・・それ以来自分のところへ近づかなくなった彼に対しては多少遺憾に思いつながら遠くからその動静を見守っていたものである。・・・』（小学館 群像日本の作家17 太宰治 p 149）としている。

この経緯については、多くの研究書があり、野原一夫 太宰治 生涯と文

学は詳しい。こうして、太宰の芥川事件は2度の山場を過ぎたことになる。

一方、佐藤は、日本浪漫派の面々をはじめとして、多くの後輩から慕われ、「門弟三千人」といわれる。春の日会という集りが毎年行なわれていた。昭和24年に始まって39年まで、16回開かれた。春夫の親しい友人、知人、門人とみられる人々には堀口大学、稲垣足穂、高橋新吉、山之口獏、中谷孝雄、淀野隆三、外村繁、保田與重郎、檀一雄、亀井勝一郎、井伏鱒二、井上靖、西脇順三郎、奥野信太郎、吉田精一、林富士馬、島田謹二、柴田錬三郎、堀辰雄、中村真一郎、木山捷平、和田芳恵、五味康祐、庄野英二、庄野潤三、遠藤周作、安岡章太郎、吉行淳之介、古山高麗雄などがある。

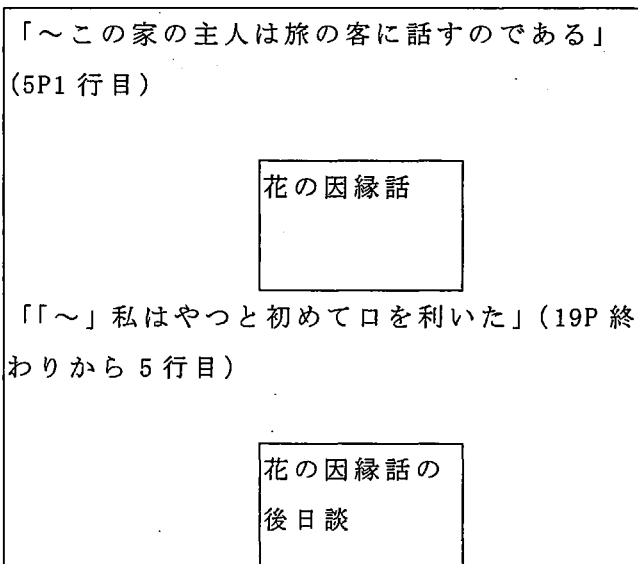
しかし、こうした動きはすでに「歴史」の中に入りつつある。「佐藤春夫」という固有名詞は実在の人物を指すものとしてより「歴史」を示す記号として置換されるようになっていく。

Ⅱ. 「作品」の「現実」について

次に作品から読み取られる「現実」を見てみよう。

(1) 作品の構成

「～この家の主人は旅の客に話すのである」(5P)と最初に話し手(この家の主人)が登場し、その後、その語った話が続いて、「「～」私はやつと初めて口を利いた」(19P 終わりから5行目)以降、聞き手(記者/私)が登場する。話し手から聞いた話の聞き書きとして、「あの花ですか」(5P4行目)から「其仲間は無論、みんな銃殺されました」(21P4行目)までの内容がある。



「話を聞き終わった記者は、～その種を内地へ持つてかへらうと思ひ立つた」(21P6 行目～)

聞き書きの内容は、「あの花ですか」という形で最初に取り上げられた、松原という入植者が持ち込んだ庭に咲いている花の由来を語る「因縁話」である。

語り手と聞き手を出して、間に語り手の語る話を挟み込むこうした形式の作品は、同時代の他の作家でも、よく見られる。

芥川龍之介『黒衣聖母』『秋山図』1920（大正 9）年

* 佐藤春夫とは 1917（大正 6）年に出逢って交友を始めた。

志賀直哉『濁った頭』『襖』1911（明治 44）年

問題点 1 こうした構成をとることで生まれる効果は何か。

永尾章曹（1991）「芥川龍之介—文章構成について—」『表現学大系 1 2』教育出版センター

「前文と後文とは、（中略）作品の主題を導き出しているように思われるのである。（中略）それは、「妙な伝説」や「不思議な話」を、単なる伝説や話ではなく、小説として普遍的な意味のあるものに高めているとも考えられるようである」14P

何かを挟み込むという手法は、現代の大江健三郎や村上春樹にもつうじるばかりでなく、テレビやマスコミの「作品」でも同様である。ここからは「小説」の「現実」がその他の言説と深い繋がりを持っていることが浮かんでくる。

（2） 聞き書きの内容

「花」の「因縁話」の内容は、紹介に続いて、松原夫婦の事件の経緯、事件の後日談として松原の持ってきた種子が全島に広がったことと、「私」が登場したあと、事件の後日談として、夫婦の身の上と犯人の逮捕と銃殺がある。

紹介：

「あの花ですか。～日本的ななつかしみがあつたからかもしれません」（5P1 行目～6P4 行目）

松原夫婦の事件

（6P6 行目～18P 終わり）

事件の後日談

I 松原の種子
（19P1 行目～9 行目）

「「～」私はやつと初めて口を利いた」（19P 終わりから 5 行目）

事件の後日談

II 松原夫婦の身の上と犯人の銃殺（19 行目終わりから 3 行目～21 行目 4 行目）

（a）庭と花の紹介

作品には台湾の植物が登場している。

あの花ですか。あれは名も無い花ですよ。～台湾の草原ならどこにでもいやといふほど茂り蔓つてゐる奴です。（中略）所謂庭木らしい庭木はただあの蛇木の下にある茉莉ぐらゐなものでせう（5P4・5 行目）

* 蛇木：台湾では、筆筒樹（別名：蘭盆筆筒樹、蛇木、山棕蕨）。日本では、木性羊齒（シダ）あるいは、ヘゴ。台湾では、北部で、普通に見られる。園芸用の材料として、籠や鉢を作ったり、蘭の栽培土として使われている。



ヘゴ ヘゴ科

学名 : *Cyathea spinulosa*

木性の大型シダで、高さ 4 ~ 8 メートルにもなります。湿気の多い場所を好み、幹は黒褐色の気根で網状に覆われています。八丈島以南に分布します。

(<http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/BotanicalGarden/HTMLs/hego.html>)

茉莉 : 日本ではジャスミン。茉莉花 (マツリカ) モクセイ科 学名 : *Jasminum sambac* 別名 : サンバク, ジャスミンアラビアからインドに分布する低木で、花に芳香があり、香水の原料やジャスミン・ティーとして利用される。



b) 花に関する因縁の紹介 (5P 終わりから 6 行目 ~ 6P4 行目)

こうした植物と作品の内容とは「因縁話」という点で関係がある。

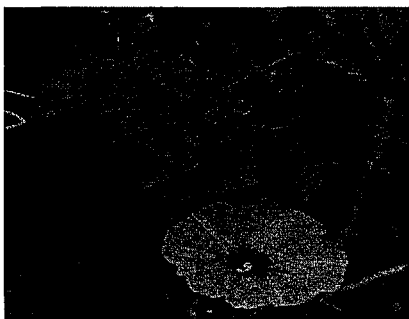
それにあの花を垣根にからませてあるについては、(中略) 少しばかりこれに纏る因縁話があるのです。そのために私は三十年近くも、家は幾度か代ったが庭にはいつものあの花を植えます。／ももと内地にはないのでから日本の名前はありますまい。(中略) 私だけは、あれを松原朝顔と名づけてゐるのです。松原といふのは私の友人です。それをこの土へ植ゑ付けた男なのです。アフリカから持つて来たのです。(中略) 花はまるで白朝顔だし葉はまづ麻の葉でしょう。松原がわざわざそんな種を持つて来たのも、これに日本的ななつかしみがあつたからかもしれせん」

ここから第二の問題が生じる。

問題点 2 「私は三十年近くも」

これによって因縁話の時代が推定できる。松原の話は、「明治 29 年のたしか春であったかと思ひます」（6P6 行目）当時のことで、松原は「二ヶ月ばかりすると、もう台湾へ渡つ来た」（8P 終わりから 2 行目）とある。また、「主人」は「その後約三十年近くの私の生涯」（10P10 行目）とも言っている。明治 29（1896）年は日本が台湾を占領して二年目で、芝山巖事件など各地での抗日運動が激しかった。それから、30 年とすると、1916 年ぐらいになる。佐藤の台湾旅行は、1920 年なので、この話はそれより前に聞かれた話ということになる。時期が完全には一致しないが、はたしてこれは佐藤が実際に聞いた話であろうか？

問題点 3 「あの花」「花はまるで白朝顔だし葉はまづ麻の葉」



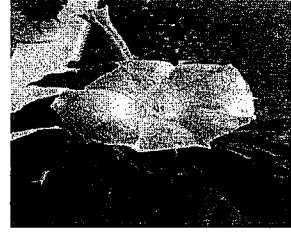
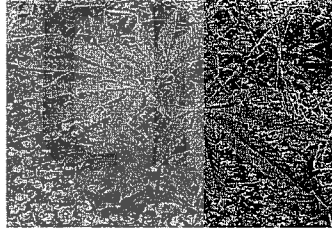
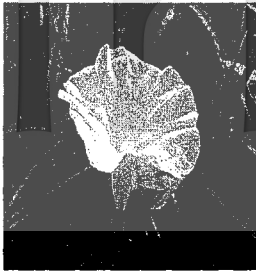
モミジヒルガオ *Ipomoea cairica*

北アフリカ原産と推定されているが、熱帯アジアとアフリカに広く分布している。東南アジアで非常によく繁茂しているのを見た。香港付近でも樹木にまわりつくほど繁っている。葉には深い切れ込みがあり 5 尖性である。カエデに似ているので、この名がついた。花はうすいピンクで、筒の色が濃い。

(http://protist.i.hosei.ac.jp/Asagao/Yoneda_DB/Images/PCD2522/htmls/50.html 米田秋芳)

モミジヒルガオ（紅葉昼顔）の名前の他に、台湾アサガオ（台湾朝顔）、モミジバヒルガオ（紅葉葉昼顔）で、誤用としてリュウキュウアサガオ（琉球朝顔）とも呼ばれる。分類はヒルガオ科イポメア属タイプで、多年草（蔓性）。栽培は、水はけのよい土に植え、日当たりのよい場所で栽培する。条件がよいと一年中開花する。自家受粉せず、普通は挿し木で殖やす。暖かい地方では露地で越冬可能といわれる。

中国沿岸、東南アジアに広く見られるという点と、本文では「白朝顔」とあり、朝顔に似ている花で、葉の形は、「麻の葉」に似た五枚に分かれた形ということから見ると、この花をさしているようである。



白い朝顔

麻の葉 (大麻)

朝鮮朝顔

しかし、「白朝顔」は色が合わない。どうして「白朝顔」わざわざ言ったのか？ここでの「白朝顔」は、朝鮮朝顔のことか。また、「自家受粉」しないということから、「種」を松原が持ってきた (19P) というのは、よく分からない。「種」を送る (21P) という話も、合わないところがある。

(c) 松原夫婦の事件

作品のストーリーは、夫婦の事件を中心にしている。

(あ) 松原が台湾に来るまでの経緯 (6P6 行目～8P 終わってから 2 行目)

「明治 29 年のたしか春であったかと思ひます」(6P6 行目)

日章旗の下で生きたいので台湾で仕事ができるかという問い合わせの手紙が、約二十年前に奴隷に売られ、今アフリカにいる松原から来た。総督府は、できるだけの便宜を取りはからうという返事を出し、松原が二ヶ月ばかりして台湾に来た。

* 明治 29 年：1 月抗日軍が芝山巖を襲撃、日本人 6 名の學務員を殺害／陳

秋菊、胡阿錦などが連合して台北城を攻撃

1 月 29 日 日本外務省、台湾全土の平定を発表

3 月 30 日 日本政府、「6 3 法」を発表 (台湾総督の法律公布権などを決める)

4 月 1 日 総督府、撫墾署を設置し、原住民の撫育、授産、取り締まり、未開墾地の開拓、山林・樟腦の管理を行う (恒春、台東、など)

5 月総督府立国語学校を設立

6 月桂太郎第二代総督着任／「台湾新報」創刊

7 月総督府衛生顧問 W. K. Burton が台北市の衛生建設を始め／台湾総督府臨時法院條例を公布。

8月総督府、「台湾住民戸口調査」を行う

9月恒春国語伝習所が原住民教育を始める

10月総督府、犯罪即決例を發布／乃木希典第三代総督赴任

(『臺灣全記録 増訂版』(1998) 錦繡文化企業)

(い) 私(主人)と松原夫婦の紹介(8P終わりから1行目～10P5行目)

私:「18の時に戦争が始まったと聞くと家を飛び出して、(中略)南京官話で陸軍の通譯官にされたかと思ふと(中略)再度志願して臺灣へ(中略)そのころ、私たちのような青年は日本にはざらにあったものです」

*戦争:日清戦争(1984～85)を指している。

*南京官話:官話は、共通語として用いられていた中国語で、北方の北京官話、江南の南京官話、内陸部の西方官話があった。江戸時代には貿易の必要性から南京官話がよく用いられていたらしい

(http://www.tok2.com/home/okazima/data/arisaka_fa.html)。それが、明治時代になって次第に北京官話に代わっていった。

明治初期中国語会話書の日本語 - 『亜細亜言語集』・『総訳亜細亜言語集』を中心に -

発表者／園田 博文氏(東北大学大学院生)

中国語会話書は、従来、国語学の資料としては殆ど用いられてこなかったが、江戸時代以来の唐話(南京語)の教育から北京官話の教育へと転換した明治九年から明治二十年頃までの教本は、東京語の成立とも関わる重要な資料とする考察である。中でも、まとまった日本語が口語の形で現れているのは広部精『亜細亜言語集』(明治十二～十三年)・『総訳亜細亜言語集』(十三～十五年)、福島九成『参訂漢語問答篇国字解』(十三年)、田中正程『英清会話独案内』(十八年)、呉大五郎・鄭永邦『日漢英語合璧』(二十一年)の五点である。著者・訳者はほぼすべて士族出身者であるという共通点もあるが、均質的なものではなく、会話のレベルが広部著作中の「六字話」「問答編」のように階層・場面・発話者名などを明示した小説に匹敵するような対話から、文の列挙・単語の列挙といったものまで様々である。

(<http://sizcoll.u-shizuoka-ken.ac.jp/~tsuruhas/kokugo/youshi97.htm>)

また、同じ時代、中国との関係で中国語を学んでいた若者は、少なくない。

山田良政は明治元(1868)年1月元旦、津軽藩士の長男として、青森県

弘前で生まれた。長じて青森師範学校に学んだが、食事を不満とする寮騒動の首謀者として退学処分となった。

同郷の著名な言論人・陸羯南（くがかつなん）を頼って東京に出た。陸から「日本として、いま大切なのは清国の研究である」と諭された良政は、中国語の勉強に励み、北海道昆布会社の上海支店勤務を命ぜられて、大陸に渡った。

1894(明治27)年8月、日清戦争が勃発し、良政は陸軍通訳官として従軍する。この頃には良政は完璧に中国語を話し、有数の中国通となっていた。戦争終了後、海軍に依嘱されて、ロシア、ドイツ、フランスなど列強の中国の利権を狙う動きを探った。その後、革命派の王照をかくまい、日本へ亡命させた。1899(明治32)年7月、孫文は神田三崎町に居を構えていた良政を訪ね、孫文の革命思想を聞いて、たちまち意気投合し、その場で同志としての支援を固く約束した。

1900(明治33)年早春、良政は5月に開校となる南京同文書院の教授兼幹事として赴任することになった。その頃、中国では義和団の暴動が華北一帯に広がっていた。孫文は義和団の乱と清朝の衰退を見て、革命の好機到来と、7月に香港海上に停泊する佐渡丸の船中で、宮崎滔天(とうてん)ら日本人志士たちと、蜂起の場所を惠州と定め、具体的な手筈を整えた。その後、孫文は訪日して資金・武器・弾薬を調達しようとしたが、思うように集まらない。そこに良政から、台湾へ行って総督府民政長官・後藤新平と交渉するよう連絡が入った。後藤新平は良政の叔父で初代弘前市長、後に衆議院議員となった菊池九郎に目をかけられ、親交を続けていた関係で、良政とも懇意だった。孫文はその勧めに従って、9月27日に台湾に赴く。良政も同文書院の教授を辞して、同志と共に台湾に向かう。孫文と良政は台北で落ち合って、後藤新平と台湾総督・児玉源太郎に会い、惠州挙兵の援助を求めた。児玉は、革命軍が惠州を占領し、海岸線のある陸豊、海豊に着いた時に、3個師団分の武器を手渡そうと約束をした。孫文は日本の援助があれば革命は成功すると自信を持ち、ただちに秘密結社三合会の首領・鄭士良に蜂起の指令を送った。それに従って鄭士良は10月6日、惠州三洲田で蜂起した。これが中国革命の最初の烽火となった「惠州起義」である。孫文は台湾を基地として、惠州革命軍に指令を与えつつ、児玉総督・後藤長官と会談を重ねた。一方、良政は孫文の命を受けて、海豊で兵を挙げるべく現地に入った。ところが、たまたまこの時、日本では内閣交代があり、山県有朋から政

権を引き継いだ伊藤博文内閣は、西洋列強との協調を方針として、中国の内政への不干渉政策をとり、孫文への武器提供や日本人将校の革命軍への協力を厳禁した。これで児玉総督の武器供与の約束もすべてご破算になってしまった。蜂起の継続は不可能と判断して、孫文は海豊にて挙兵準備を進めていた良政ら同志数人を鄭士良の軍営に派遣し、状況説明と臨機の処置を一任した。良政らが鄭士良軍営に到着した時は、すでに弾薬は尽きていた。良政の説明を聞いて鄭士良は革命軍の解散を決意した。密使としての役割はこれで済んだので、本来なら良政がこれ以上、革命軍につきあう義理はなかった。しかし良政はあえて撤退する軍と行動をとともにした。撤退する革命軍の背後から清国官軍が襲いかかった。10月22日、惠州東方の三多祝において、良政は殿（しんがり）となって戦う最中に捕らえられた。中国服をまとい、荒縄を腰に巻いていて、日本人とは名乗らないまま処刑されたという。遺品の金縁眼鏡や千ドルという大金から、指揮官・港兆麟は日本人の宣教師か何かであろうと思い、国際問題になることを恐れて、遺体を埋葬したあと厳重な箝口令を布いた。12年後の1912(明治45)年、孫文はようやく辛亥革命に成功し、翌年、準国賓として来日して、東京谷中の寺院・全生庵に「山田良政之碑」を建設した。この時に孫文は、良政の両親と未亡人とし子と会見し、「良政さんが中国革命のために、外国人として初の犠牲者となって下さったことを、全中国国民を代表してお礼申し上げます」と述べた。孫文は1918年の夏には、部下を惠州に派遣して、良政の遺骨を探させたが見つからず、やむなく持ち帰った三多祝の土を純三郎に手渡した。さらに1919(大正8)年には幕僚を使わして、弘前の山田家の菩提寺・貞唱寺にもう一つの碑を建て、自ら碑文を書いた。

(http://www2s.biglobe.ne.jp/~nippon/jogbd_h15/jog319.html 国際派日本人養成講座／

http://www.yatsen.gov.tw/chinese/publication/show.php?p_id=11&iid=286 国立國府紀念館館刊資訊 11 期、また、

<http://www.japanresearch.org.tw/director-16.asp> 台湾日本研究所・許介麟「児玉、後藤如何欺騙援助中國革命」)

西島良爾—中国語とともに生きた明治人— 柴田清継

静岡県選抜生として上海の日清貿易研究所に学んだ西島良爾は、日清戦役時に陸軍通訳となって出征したが、戦後、大阪控訴院の中国語通訳官となり、大阪在任中、大阪清語学校を起こすなどして中国語の普及に

努めた。また日中両文の新聞『日華新報』の編集にあたるなどして日中親善に尽くすところが少なくなかった。

(<http://www.izumipb.co.jp/sinkan/02apr.html> 『関西黎明期の群像 第二』 馬場憲二・管宗次編 和泉書院)

* 「ざらにあった」

また、アジア主義の動きが活発で、「興亜会」が明治 13 (1880) 年に設立され、アジア言語の教育が重視され東京に「支那語学校」を設立し、二年後に東京外語学校へ引き継がれた。また、大阪、神戸、熊本にも「支那語学校」を設立した。その後、明治 16 (1883) 年に「亜細亜協会」と改称されたが、漢文教育は引き継がれた。明治 24 (1891) 年には別に「東邦協会」が設立、中国大陸での革命運動を支援するようになった。そして、明治 31 (1898) 年には「東亜同文会」が設立された。

(狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察」

<http://www.kazankai.org/publishing/toa/>)

* 「通訳官」

ポール・パークレー「日本人植民地者と原住民の交流問題—台湾の『蕃界』における通事と通訳をめぐる」(<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/asorder/meetings3-02.html>) によれば、

日本領台初期の「通事」台湾が割譲された 1895 年 5 月、台湾総督に属した最初の中国語「通訳」が大陸から渡台した。日清戦争に従軍したその通訳は、大抵「官語」を話したが、殆どの台湾人が話していたのは福佬語或いは客家語であった。そこで、筆談以外に意志疎通を図るため、日本人「通訳」の他に台湾人「副通訳」が必要になった。日本人「土語通訳」は試験に合格し、相応の等級と給料を貰った。しかしながら、「蕃界」に行くためには、「通訳」と「副通訳」の上に「蕃語通事」が必要だった。「蕃界」の言語状態は複雑だったので、地元に住んでいた者以外、誰も「タイヤル語」や「パイワン語」や「ブヌン語」等が分からなかったのである。そのため、日本人の守備隊や撫墾署(清撫墾局の模倣)の探検隊や樟腦商人等は、「蕃界」に入る際に「通事」を雇った。

下記の 1896 年『太陽』に掲載された記事は、19 世紀末の過渡期における「通事」体制を的確に描き出している。

「通事とは、土人の蕃語を能し蕃情に通ずる者にして、一社若くは数社(社は番人部落の称)に一人あり、貿易、交通、交渉等何によらず両間に周旋するものにして社丁は即ちその下に属し、一社に必ず一人あり。

されども通事、社丁とも常に蕃社に在るにあらず、要なきときは家居して別に業を営み、自己の要あるか又は人に雇はるるに及んで出でて事を弁ずるなり。又此通事社丁となるには、志望者之を官に稟し、官之を准じて蕃人に通ずるの慣例にして、蕃人は官の通知を信じて万事を委任するものなりという。其収入の如何は知らねど、一旦通事社丁となりたる者は終身已むることなしと聞けば、思ふに少なからざるものなるべし。」

1895-96年に派遣され、宜蘭、大嵙崁、苗栗、台東の「初蕃会見」に参加した「通事」の多くは、「民蕃」夫婦と関係があった。日本人の探検隊と原住民が出合った際、「土語」（台湾語）が出来る「蕃婦」が毎回来ていた。1895年9月に橋口文蔵殖産局長が、総督府民政部の代表として初めて頭目との面会に参加し、そして「ワシェーガ」というタイヤル族の女性と4人の大嵙崁社住民が橋口と一緒に台北に戻って来た。「ワシェーガ」は当時19歳、「十六歳の時或支那人に嫁し昨年故ありて離縁となり今は後家なりといふ少しく台湾土語を解し得て其服装も支那婦人服の古着を着け髪も怪しげなる束髪に結べり」。その探検隊は日本人の「通訳」も使ったが、「通訳」は直接原住民の相手と話せなかった。日本人の最初の「蕃語通事」は原住民頭目の娘を娶ったが、その「蕃通」（近藤勝三郎）は官吏ではなかった。むしろ近藤は「蕃産」の商人として、たまに総督府に雇われることもあった。台東県では、相良長綱撫墾署長のもとで、清朝時代の「土目及び通事…公に関する重事及び蕃租の収領蕃地の給出」に相当する通事に対して、小額の手当を毎月支払っていた。

上記のように、領台初期の「通訳」は政府に身分と給料を保証された官吏であり、相応の語学試験に合格した者であった。一方「通事」は「蕃語」が出来た漢族人、又は日本語や漢語が出来た原住民や「民蕃」夫婦等で、役割は原住民と非原住民の仲介をすることであった。

以上のことから、清朝時代と同様、「通事」のイメージや評判はあまり良くなかったといえるだろう。1896年には斉藤賢治という樟脳商人が、次のように述べている。

「通事のことを台湾では『トンツウ』と申し…生蕃語を学んで通事を使はぬやうにするが第一の急務です、此の訳は…通事を使ふを不利益と申す訳は何時も通事は生蕃の方の肩を持つとが多く、製造人の方の利益を図るものは少ないです」。

言語が通じないのを「奇貨とし中間」で不正をなすとの疑念がつきま

とう「通事」の他に、総督府は「蕃婦」を探偵や「使」として利用していた。以下の例はその代表的なものと思われる。

1895年12月、「蕃人を綏撫するの策を講ずるを以て最も急務となし乃ち北方生蕃の女にして現に城外熟蕃人の家に嫁せると使とし物を与へて日本官吏来着の旨を公に告げ」『読売新聞』

1897年「八月二日溪頭社蕃ノ警アリ…転送埤ニ住スル生蕃婦（旧政府ノ所謂蕃婆ナリ）ヲシテ山ニ入り探偵ヲ為サシメタリシ」『台北州理蕃誌』

1902年12月、「南投廳埔里社支廳に於ては北兼て北蕃より出山移住したる蕃婦イワン…霧大社に入らしめ馬那邦蕃討伐等に付蕃人が如何なる觀念を有するやを搜らしめたる」『台湾民報』

1903年11月、「南澳蕃情偵察の爲め北蕃婦タッパス…は叭哩沙支廳を出発して」『台湾民報』

残念ながら、上記の「蕃婦」が日本人官吏とどのような交流の方法を持ったかについては、はっきり記録されていない。恐らく、その原住民の女性は日本人に娶られたものと思われる。「生蕃近藤」以外にも、1896年頃に最初の埔里社撫墾署長檜山鉄三郎がパーラン社の頭目の娘を娶り、また軍人及び辨務署長である「竺紹珉」という日本人も頭目の娘を娶っている（『報知新聞』；『台湾協会会報』）。1899年までに、日本人と原住民との婚姻率は上昇していた。

（う）総督府による土地の下付（10P6行目～14P終わりから3行目）

私は通訳官を辞め、未開地（蕃地）を踏査していたので、松原の相談役として、花蓮の土地を紹介したが許可が下りず、恒春の「三角湧」の近くの土地を紹介し、「台湾討伐の当時の激戦地」とであるという歴史が気に入って松原は、そこに土地をもらった。私はこの地方の「頭目」と親しかった。私は、以前、その頭目の命を助けたことがあり、御礼に赤ん坊をくれるといったが、替わりにトンボ玉をもらった。

*蕃地を踏査：吉川朋子「領台初期における先行研究と研究調査機関」

<http://sinica.mine.utsunomiya-u.ac.jp/jyugyo/sotsuken/03semi/030710yoshikawa.htm>によると

森丑之助（1877-1926）は1877年（明治10年）、京都市に生まれる。長崎で支那南方官話を学んだ後、1895年（明治28年）9月に陸軍付き通訳として18歳で台湾へ渡り、30余年を台湾で過ごすことになる。森はすぐに未踏の山地に興味を持ち、探検を行った。その際、何度か鳥居龍蔵と顔を合わせ、鳥居の第4回目の台湾調査の助手を務めたことを機に

人類学の調査・研究を行うようになった。やがて森自身の調査報告を『台湾時報』を中心に投稿している。森が研究者として最も活躍したのは、明治末から大正半ばにかけての約 10 年間である。1908 年（明治 41 年）に開館した台湾総督府博物館の嘱託職員として開館の準備段階から携わり、「蕃俗」資料などの収集を行う。翌年には総督府警務本署蕃務課の嘱託として、1910 年（明治 43 年）には調査課の嘱託として働く。1912 年（大正元年）に出版された『日本百科大事典』では「臺灣蕃族」の項を執筆しており、この時の民族分類が臺灣総督府にも採用され、1913 年（大正 2 年）発行の『理蕃概要』は、森の執筆が基本となった。同年、森は臺灣総督府を辞職して一旦帰国したものの、翌年には再び台湾へ戻り、臺灣総督府臨時台湾旧慣調査会の嘱託として 1915（大正 4 年）に『臺灣蕃族圖譜』（全 2 巻）を、1917 年（大正 6 年）には『臺灣蕃族志第 1 巻』を出版した。しかし 1923 年（大正 12 年）の関東大震災により、東京の自宅に保管していた研究資料を焼失、責任をとって辞職した。その後大阪毎日新聞の嘱託となり、研究を継続したが、1926 年（大正 15 年）7 月 4 日、基隆から日本（神戸）へ向かう船の乗船名簿に名を残したまま、自殺した。

森丑之助は、「霧社」に案内をしてくれた M として登場している。邱若山 (2002)『佐藤春夫台湾旅行関係作品』致良出版社が、詳しく佐藤と森の関係を調査した。また、その P151 では、「霧社」13 節の原住民の首狩りの意味を引用して「M 氏のこの意見は「日章旗の下に」にも話をする主人の見方として殆ど同じものが述べられている」とある。「日章旗の下に」の「主人」の経歴から見ると、モデルは、森丑之助かもしれない。

* 台湾討伐の当時の激戦地／唱歌などにも歌われた：三角湧
教育部臺灣省國民學校教師研習會「以社會領域爲主軸之課程統整編寫：〈我愛三峽〉參考示例」<http://www.naer.edu.tw/announce/9teach-1/c/c1/c21.htm>によると、

乙未（一八九五）割台消息傳來，全名震撼，台人悲憤之餘，起而抗日，一時之間，全台烽煙四起，而三角湧，正是北部抗日義軍最重要根據地；計自日軍登陸，明治二十八年（光緒二十一年、一八九五）七月十一日，由台北出發向三角湧推進，至四十二年，山地地區全入日人掌握止，前後十五年，三角湧義軍英勇抗日，歷經無數次戰役，犧牲慘烈，直可說驚天地而動鬼神，茲舉其大者以見一斑：

1 明治二十八年七月十一日日軍運輸船隊自台北出發，十三日會合步

兵夜宿三角湧河岸，十三日晨溯溪而上，被義軍統領蘇力在隆恩埔（今龍埔里）兩岸設伏夾擊，日軍除三人泅水而逃外，運糧隊全軍覆沒。

2 另一路日軍約九百人，於十二日下午五時左右抵三角湧後，夜宿祖師廟、上帝公廟、李家大厝、媽祖廟及沿街店舖廊下，十三日清晨，出三角湧街，沿鳶山南麓土地公坑溪左岸之谷道南進，蘇力、江國輝率義軍在分水嶺山谷圍攻，困日軍於谷底，激戰至十六日晨，日軍板橋支隊山根少將，率軍馳援，炮轟大料炭街，大料炭街遂陷入日軍之手，義軍以兵力、火力懸殊而撤離，日軍乃得脫圍，是役戰況慘烈，雙方各有約四、五百人戰死。乃日人登陸台北以來第一大戰

3 日軍因在三角湧遭遇強烈抵抗，死傷既重，復不得南進，乃決定採取焦土政策，清除抗力，遂集結步兵、騎兵、工兵、炮兵等，以強大火力實施掃蕩，七月二十一夜下令進攻，二十二日重兵猛撲三角湧，蘇力率義軍在土地公坑，力抗日軍主鋒，二十三日晨，日軍本隊循山路推進，義軍襲其右翼，日軍炮擊無功，改以攀山仰攻，雙方短兵相接，終以火力、人員懸殊，陣地失陷，繼之三角湧街亦為另一路日軍攻陷，所至之處，燒殺極殘，板橋、大溪、三角湧，盡成廢墟，義軍陣亡者逾五百人。

問題点 4：これは、台北の今の「三峡」付近の戦闘での近衛師団の一個小隊の戦闘のことと思われる。台北付近の抵抗運動では、最も激しい戦闘があった。しかし、南部の屏東・「恒春」の「三角湧」での日本軍の全滅という事実はない。この松原が土地を決めた部分は、史実に一致しない。台湾とその当時の歴史を知らない読者には見過ごされてしまうが、当時、台湾の事情をある程度知る読者が居ればこの部分から、この作品は破綻してしまうことになるのでは？史実を踏まえた上で創作の経緯を推定すると、（１）この聞き書きは、事実ではなく、創作である、（２）聞き書きではあるが、佐藤が内容の理解を誤ったか、書き換えた（３）話し手が聞き手自身に記憶違いがあったなどの可能性が考えられる。唱歌も今のところ不明（日本で「小学唱歌」を作っていた伊沢修二が、三角湧の戦闘の頃、台湾にいたという。伊沢がそれを題材に、唱歌を作った可能性もある）。

* トンボ玉／一尋：一尋は六尺（1.8M）。台湾原住民の装飾品として、日本のホームページでも紹介されている。

台湾南部にある三地門には、先住民族の一つであるパイワン族が多く暮らしています。彼らは、かつて海の彼方から渡ってきた“トンボ玉”と呼ばれるガラス細工を、宝物として大切にしてきました。現在は、町にある三つの工房で制作されています。その中のトンボ工房の施秀菊さん

(47)の活動を中心に、民族の心がつまった美しいトンボ玉の世界を紹介します。また豪華な結婚式で、年代物の貴重なトンボ玉の首飾りにも出会います。(NHK「地球ウォーカー」

<http://www.nhk.or.jp/globe-walkers/globe-walker/blist/030906con.html>)

天理参考館 <http://www.sankokan.jp/selection/e/etwn/etwn003.html>

台湾の南部山地に住むパイワン、ルカイのリーダーである首長家に家宝として代々伝えられてきた首飾りです。蜻蛉玉(とんぼだま)と呼ばれる鉛ガラスの玉をつなげて作ってあります。

かつて、パイワン、ルカイではこのような蜻蛉玉には神聖な力がある信じられ、単なる装飾品としてではなく、シャーマンが行う病氣治療の儀式にも使用されていました。



(え) 松原夫婦の殺害事件 (14P 終わってから 2 行目～18P 終わりまで)

松原を訪ねようと私は、前の晩、恒春の役所に泊まった。夜、松原が殺されたという報せが来た。松原の家に行くと、二人の首無し死体があった。トランクが荒らされていた。「私たちは一見してそれは決して蕃人の所為ではない事を確信した」自分たちが来ていればとも思ったが、いずれは目星をつけられて「運命はのがれられなかつたかと思はれる」。松原の畑には、五寸ほどのコーヒーがあるばかりだった。私たちは松原の種を見つけだした。

(お) 事件の後日談 I

松原の持ってきた種は、台湾には適さなかったが、「朝顔に似たあの花」だけが全島に広がった。「私はこの花を見ると (中略) 松原の霊が花になったかとさへ思へるのです」

(か) 事件の後日談 II

一度、松原の海外での生活を聞こうとしたが、奥さんの拒否で、分からな

いままになった。その後、犯人は十年後、台中付近で捕まった強盗団が松原のピストルを持っていたことから分かった。強盗団は銃殺された。

問題点 5 「私たちは一見してそれは決して蕃人の所為ではない事を確信し

た」：この理由は、「霧社」第十三節の原住民の首狩りの意味と同じで、ここから主人が原住民の習俗に通じた人物であることが分かる。「主人」に森丑之助が反映しているか、モデルになっている、あるいは、この作品が実際の聞き書きだったという可能性が考えられる。

問題点 6 作品の題名「日章旗の下に」は7 Pの松原の手紙の一節「自分の生まれた国の旗の下で生きてみたい」と呼応し、志なかばで非業の死を遂げた松原を悼む「松原の霊が花になつたかとさへ思へるのです」という主人の述懐によって、松原の遺志がそうした形で生きていっているようにも見える。そこから考えると、作品の主題はなんだろうか。

問題点 7 作品の読後感。作品は、今読むと、いかにも古めかしい感じがする。

その理由の一つは、作中の人物に、同化しにくいという点があるかもしれない。主人、聞き手、あるいは松原のどれかが、小説的人物として形成されていれば、もう少し、別な作品になったのではないだろうか。逆にいえば、それが、この作品が森丑之助からの聞き書きに多くを拠って、ほとんど加工されていないことを告げているようにも見える。歴史資料としての価値を、当時の歴史記事から裏付けるのも、一つの方向か。また、「モミジヒルガオ」の由来譚として見ると、植物の渡来史の一資料かもしれない。

3. おわりに

一般には小説は「現実」ではないと信じられている。しかし、ニュースであれ歴史であれ、報告であれ、いかなる形でも自分が直接認知したり経験したりできない時間的空間的に離れた「現実」を言語で読み取る場合は、それが言語によっている以上、小説を読み取るのと同じように、多くの問題が生じる。また、言葉に依らないでそのような「現実」を読み取る方法を私達は持っていないともいえる。このような問題を乗り越えて「現実」は再構成されるのであって、誰にとっても一義的で自明であり、またそれに接近するのにいかなる方法も証明も不用な「現実」は実は幻想に過ぎないとも思われる。

「現実」は読み手に読み取られることによって「現実」となる。20世紀の言語研究がたどり着いた地平はこの点を共通して指向しているのは間違いないであろう。

(初出) 94年度東呉大學日文系名著研讀會 2月例会 佐藤春夫「日章旗の下に」